

論文概要

本論文は、アメリカ合衆国の学術系出版社である Peter Lang Publishing (New York) 社より 2020 年に出版予定である。

本文に替えて以下に論文要約を記載する。

英文タイトル：

Global Racetrack: The Representation of African American Athletes in Japan during the Cold War

日本語タイトル：

グローバル・レーストラック：冷戦期日本におけるアメリカ黒人アスリートの表象

筑波大学大学院 人文社会科学研究所

現代語・現代文化専攻

氏名：佐々木 優

本論文は、冷戦期のレジームの中で動員されたアメリカの黒人アスリートと第二次世界大戦後の日本との間で行われた人種接触が作り出した“global racetrack”という独特のスペースに着目することで、日本と日本のメディアが黒人アスリートの身体、移動性、イメージ、影響力、評価を作り出すことに果たした重要性について考察することを目的とする。本論文をスポーツ、文化、人種接触の異なる領域の交差点に位置付けることで、従来まで重要でありながら見過ごされてきたスポーツにおける人種接触が生み出す想像力について着目することで、ディアスポラ研究やトランス・カルチュラル研究の領域への新たな貢献、さらには介入を試みるものである。

第二次世界大戦前より、日本とブラック・アメリカは有色人種間の相互交流をおしはかってきた。例えば、日露戦争にて日本が白人国家であるロシアに対して勝利を収めた後、W.E.B. デュボイス (W.E.B. Dubois) のような数名の黒人有識者たちは白人優越の世界に対抗するため、有色人種の同盟を日本と結ぶことを画策した。この黒人有識者の間の日本支持の風潮は、1941 年の日本による真珠湾攻撃の後、いくらか消え去ることとなった。し

かし、戦後のアメリカ占領下の日本は、そうした人々にとって再度、スポーツという観点を通して人種問題について考える新たな場として表出するようになった。

冷戦期、アメリカにおける黒人アスリートはスポーツ活動だけでなく、スポーツを通じた親善訪問を行う「文化大使」として米国国務省により任命され、特にアフリカやアジアなどの第三世界における文化・人種接触を巻き起こした。国内でくすぶる人種差別問題の解決と民主主義の教義の体現者として、彼ら黒人アスリートは特殊な異文化接触をすることとなった。こうした接触は、スポーツという領域を政治的・イデオロギー的な紛争の独特な場へと変容させ、地政学的な分断や肌の色の壁を超えた折衝の場を作り出した。本研究はこのダイナミズムを、「global racetrack」または「darker racetrack」と名付け、国家や人種の境界を超えたアスレティシズムと人種主義を通じた場として名付けた。元来、競技場(racetrack)という場は、人間のみならず車や自転車などの機械や馬などの動物が競争するレース(race)の場であった。しかし、競技場(racetrack)の内と外を走ることによって、黒人アスリートたちのレースは人種の問題を巻き込む、ユニークな交渉・想像の場を作り出した。それゆえ、「global racetrack」とは人種とスポーツを巡る「闘争の場(contested terrain)」として表出するものである。

日本とブラック・アメリカの間の人種接触が20世紀にスポーツの領域に移行すると、日本のメディアは「黒人」という人種についての日本的価値観を形成するに当たって大きな役割を担った。スポーツというオリジナルな文脈から距離をとり、日本のメディアは彼ら自身のナラティブを作り出し、日本における「黒人アスリート」像をも作り出した。彼らの黒人アスリートに向ける眼差しは、メディアという様々な媒体を通して伝播された。こうした観点から、スポーツを社会に届けるメディアの役割について考えることは重要なことだと考える。エンターテインメントと強く結びつきながら、メディアはスポーツと人種やジェンダーをめぐる政治とを結びつける商業装置としての役割を果たしてきた。競技場に足を運ぶ観客でなくとも、メディアはアスリートのイメージを伝播することができる媒体として機能してきた。

本研究は、特にアフロ・アジア関係とスポーツという2つの異なる関心の交差の成果である。アフロ・アジア関係を扱う最近の研究は、黒人とアジアの接触が想像の共同体を可能なものとする国家を超えた移動性に注目して来た。それゆえ、近年の歴史家たちは主に太平洋を超えたアジアと黒人の人種接触を政治や外交の視座で眺めてきたといえよう。一方で、スポーツの研究領域では、アスリートたちが政治や経済、階級、人種差別などの領域で果たして来た役割に着目して来た。特に、近年の歴史家たちは、国内の公民権運動だけでなく、冷戦期の人種問題と絡めたアメリカの外交政策についても関心を払っている。

本研究が取り上げるブラック・アメリカと日本の研究においては、スポーツという領域を従来まで主に日米関係の関心において扱われてきた野球の領域からさらに拡大し、陸上競技やバスケットボールといった競技を包括した。それにより、さらに広範な競技領域において、日米、さらには日本とブラック・アメリカの接近・人種接触が行われていたことを論じた。また、冷戦期の日本の黒人アスリート間の人種接触の軌跡をたどることで、日本と日本のメディアが、冷戦下アメリカにおける黒人アスリート、さらにはアフリカ系アメリカ人の状況についての言論形成において果たした重要性について議論した。

本論文は、Introduction と Epilogue 以外に、全 4 章から成る。

第 1 章：

Basketball in Black and White: The Harlem Globetrotters, Japan, and Cold War Politics

第 1 章では、アメリカ合衆国のアフリカ系アメリカ人のみで構成されたショー・バスケットボールのチームであるハーレム・グローブトロッターズ (Harlem Globetrotters) による 1952 年の世界一周ツアーに注目した。従来の研究において、グローブトロッターズが冷戦期に文化大使としての側面を持ったことや、アメリカ国内におけるその発祥の起源などについての研究はあるものの、具体的な国外との結びつきを持って論じられてはこなかった。しかし、本章では、グローブトロッターズの日本における報道を分析することで、冷戦期にグローブトロッターズが果たした文化大使としての役割がいかに関に日本に布置されることで、日本独自の新たなナラティブを作り出したかについて論じた。その過程で、グローブトロッターズがアメリカ側のどのような文脈の中で来日し、いかに戦後日本の文脈と共鳴するに至ったかについて論じた。

第 1 節では、日本とアメリカにおいてバスケットボールという競技文化がもたらされ、どのような意義を担うに至ったのかについて分析を行った。1890 年代のアメリカでジェームズ・ネイスミス (James Naismith) によって考案されたバスケットボールというスポーツは、1910 年代に日本にもたらされ、アメリカほどの熱狂はなかったものの、体育教育の中で採用されるなどの普及はみられた。第二次世界大戦によって敵国アメリカの競技であるバスケットボールは一時的に避けられたが、戦後の占領下においてアメリカの競技として再び一般的な人気を獲得した。アメリカでは、特にアフリカ系アメリカ人の中でのバスケットボールは黒人特有の競技スタイルや技が導入され、独特の発展を見せたことを論じた。

第 2 節では、ハーレム・グローブトロッターズのアメリカにおける発祥の起源と、いか

に冷戦下アメリカにおいて文化大使となるまでに至ったかの背景について論じた。グローブロッターズは「ハーレム」をその名に冠してはいるが、ニューヨークではなく、1920年代のシカゴのボールルーム文化の中で生まれた。グローブロッターズの誕生に深い関わりを持つとされ、後にプロモーターやオーナーとなるエイブ・セイパースタイン (Abe Saperstein) が、黒人文化のメッカであるハーレムにあやかり、黒人選手だけで構成されるグローブロッターズのチーム名としたとされる。結成当初はバスケットボールの技術と能力のみで勝負していたチームだったが、白人観客をより楽しませるため、コメディ要素をプレースタイルの中に取り入れ、現在のグローブロッターズのスタイルが完成した。こうした系譜を振り返ることで、おどけたコメディ要素を取り入れることは、黒人のサンボのステレオタイプをむしろ積極的に取り入れ、白人社会へ参入していくための一つの重要な戦略でもあったことを論じた。

第3節では、ハーレム・グローブロッターズが25周年記念として1952年に行ったワールドツアーの中でも、特に日本におけるメディアの報道を分析した。グローブロッターズの来日は、主催である毎日新聞社の報道によると大きな歓迎を持って迎えられた。日本のメディアはグローブロッターズの来日を大々的に報道し、白人側のチームより黒人のみで構成されたグローブロッターズについて、そのプレーの技巧性の高さや魅力を紹介した。チームの記録係として同行したデーブ・ジンコフ (Dave Zinkoff) も、時にはデパートの屋上から吊るされた巨大なチームメンバーのポスターの写真を添えながら、いかにグローブロッターズというチームが熱狂を持って迎えられたかについて記した。さらにジンコフは、チームだけでなく、チームのオーナーであるセイパースタインまでもがいかに日本で人気を博したかについても記録している。

しかし、本節では、こうしたアメリカ側が作り出したナラティブとは別に、日本のメディアが主に報じた片腕の黒人バスケットボール選手であるボイド・ビュイ (Boyd Buie) に注目した。ビュイはアメリカ側の記録ではあまり注目された選手ではなかったが、日本のメディアはビュイの経歴を記事で紹介し、バスケットボール選手としてグローブロッターズにいかに迎えられたかについて報じた。ビュイに関連した日本の報道で特に本節が着目したのは、片腕を事故で亡くした経験を持つ彼がアスリートとして療護園への慰問を行い、どのように迎えられたかについて詳細に触れている点である。自らの経験を語り、努力によってアスリートになるという物語を提供したビュイを、日本の療護園で障がいを抱えた子供たちが取り囲み、別れを惜しむという場面を紹介した記事などを分析しながら、本章では、ビュイがいかに冷戦期の日本において隠れたアメリカ側の文化大使として機能し、さらに傷痍軍人であふれた戦後日本といかに共鳴したのかについて論じた。

第2章：

Tigerbelles of Tennessee State University: Race, Gender, and the 1964 Tokyo Olympic Games

第2章では、日本のメディアが1964年の東京五輪のため来日したテネシー州立大学のアフリカ系アメリカ人女性のみで構成される陸上競技チームであるタイガーベルズ

(Tigerbelles) に着目した。五輪などの世界大会において数々の記録を残したタイガーベルズは、黒人女性のみで構成されるチーム性や、アスリートでありながら女性らしさを強調するというコーチの戦略もあり、主にアメリカ国内のスポーツ史やジェンダー史の観点から学術的な関心を寄せられてきた。特に1960年のローマ五輪で金メダルを獲得したウィルマ・ルドルフ (Wilma Rudolph) の登場やメディアにおける報道の有り様は、そうした研究における重要な分析対象となった。しかし、本章では、そうしたタイガーベルズが1964年の東京五輪のために来日し、日本のメディアがいかに彼女たちを独自の視点から報じたかについて分析することで、アメリカからやってきたアフリカ系アメリカ人アスリートとして、さらには女性として、冷戦期にタイガーベルズのメンバーが担った役割について分析を行った。

第1節では、アメリカにおける女性アスリートのフェミニニティー (女らしさ) について論じた。従来までは女性とスポーツは多くのステレオタイプを生む関係であり、特に男性らしいスポーツをする女性は「女ではなく男」であるとして差別の対象となってきた。しかし、冷戦下のアメリカにおいて、突如として女性アスリートは重要視されるようになり、国際的な舞台に台頭するようになった。従来まで余暇として親しまれたスポーツの領域において、女性がアスリートや選手としてスポーツに参入してきたのは、主にテニスや水泳のような、人気があり、優雅で、洗練あるスポーツとみなされてきたようなものに限られた。こうした競技に参戦したのは、主に白人のアップパー、またはミドル・クラスの女性であり、20世紀の初頭には陸上競技はいまだ男らしく、勇猛なスポーツとみなされていた。特にテニスにおいてはドレス・コードが課されるなど、スポーツの領域においても女性は常に「女性らしさ」を強調することを求められた。陸上競技は特に力強く勇ましい、男らしいスポーツというレッテルのもと、白人女性たちから忌避される傾向にあった。しかし、二度の世界大戦を経て、世界が冷戦の時代に突入すると、スポーツは重要な戦場とみなされるようになった。アメリカとソ連を中心に、スポーツにも多くの資金が投入され、アスリートの強化競争が始まると、陸上競技もその重要なひとつの競技とみなされるようになったことを明らかにした。

第2節では、第1節で論じられたような背景の中、いかにアフリカ系アメリカ人の女性選手のみで構成された大学チームであるタイガーベルズが国際舞台に立つまでになり、いかに冷戦期アメリカにおける新たな女性アスリートとしてのアイコンにまでなり得たのかについて論じた。1952年にソビエト連邦が初めて五輪に参入した後、投てき種目を含む陸上競技種目におけるソビエト連邦の女性アスリートたちのめざましい台頭がみられた。一方で、アメリカ女性の陸上競技種目における弱さは、冷戦期のアメリカにおいて問題視されるようになった。だが、アメリカ国内において、陸上競技種目は「男らしい」スポーツとされ、冷戦期のジェンダー規範にそぐわない競技として抑圧を受け、白人女性たちが参入しないスポーツとして取り残された。こうした背景の中で、テネシー州立大学においてタイガーベルズのコーチとなったエド・テンプル (Ed Temple) は、試合後の汗だくの選手の姿をメディアにさらさず、ジャージを着ないときはハイヒールを履くことを推奨し、黒人特有の髪を綺麗にとかすことを選手たちに求めるなど、タイガーベルズの選手たちに関するイメージを「女性らしい」ものとなるように徹底的に管理した。こうしたドレス・コードと厳しいトレーニングを選手たちに課すことで、テンプルはタイガーベルズの黒人女性アスリートたちを一躍五輪選手にまで押し上げ、従来までの陸上競技種目と黒人女性に対する偏見の払拭を試みたと言える。こうしたテンプルの試みは、1960年のローマ五輪においてタイガーベルズのメンバーであるウィルマ・ルドルフが3つの金メダルを獲得したとき、ひとつの成果をみた。テンプルが望んだように、ルドルフは白人優越のアメリカ社会に介入することのできる新たな黒人アスリートとなった。さらにルドルフは、弱い陸上競技の世界におけるアメリカの新たなスター選手として迎え入れられただけでなく、その容貌の「美しさ」や「可憐さ」がメディアにおいて多く取り上げられた。よって、ルドルフの活躍は、従来までの男らしく勇猛な陸上競技選手のイメージから別離した、「強いけれども美しい」という新しくハイブリッドな(黒人)女性アスリートのイメージを作り出すことに寄与したことが明らかとなった。

第3節では、第2節で論じたアメリカにおける背景とあわせて、1964年の東京オリンピックに来日したタイガーベルズに関する日本側のナラティブを分析した。タイガーベルズは、日本のメディアにおいても「美しいトラ」として注目され、メンバーであるワイオミア・タイアス (Wyomia Tyus) やエディス・マガイアー (Edith McGuire) による金メダルの獲得は、主に新聞におけるスポーツ欄や陸上競技専誌などのメディアにおいて取り上げられた。しかし、本節では、日本のメディアが、タイガーベルズを一方では黒人女性のアメリカン・ドリームの実現者であり、スポーツにおけるひとつの成功したアスリートとして見つめながらも、彼女たちの特徴を「長い脚」や「美しい顔」などのジェンダー的な

側面からも強調しながら報じたことについて着目し、雑誌や新聞、さらには五輪の女性選手村の会報、女性アスリートの手記などを分析した。それにより、主に日本のメディアから注目の選手として関心を集めたマガイアーが、美しくも物憂げな「女王」でありながら、コーチに「従順な学生」でもあり、勝利の後には涙を流す「親しみやすい女性」として様々なナラティブの中に描写されていることを明らかにした。多くの日本のメディアが、特にマガイアーの露わになった脚に注目することで、日本の伝統・歴史の中にある着物に隠された女性の脚と異なる美しさを発見するに至ったことも明らかとなった。しかしその一方で、マガイアーは五輪の女性選手村で開催された文化交流のひとつにあった着物の着付けに参加することで、解放された選手としての脚をもう一度着物によって隠すという日本的な女性性の中に無意識ながらも自ら参入していったことも明らかとなった。こうして、日本のメディアがタイガーベルズのメンバーを通して、貧しさから成功するという黒人版のアメリカン・ドリームの話だけでなく、特にマガイアーを通して新たな黒人の美しさの物語をも描出しながら、マガイアー自身は無意識に日本式の女性の美を受け容れていたことを論じた。

第3章：

Race of African American Athletes: The Black Power Salute and Japan

第3章では、1968年メキシコシティー五輪にて米国の2名のアフリカ系アメリカ人アスリートによって行われた政治的なパフォーマンスであるブラック・パワー・サリュート（Black Power Salute）の系譜に着目した。このパフォーマンスは、米国内におけるアフリカ系アメリカ人の間で組織・企画された、オリンピック・プロジェクト・フォー・ヒューマンライツ（OPHR）と、そこからさらなる発展をみせたオリンピック・ボイコット運動を背景に持つ。社会学者のハリー・エドワーズを主な指導者として展開されたこの動きは、従来の研究においては米国内のみにおける関心でしか語られなかった。

しかし、本章が特に注目したのは、運動の中心人物であるとされたトミー・スミスがはじめてボイコットの可能性があることを明言した場が、1967年のユニバーシアード東京大会であったことである。それにより、ブラック・パワー・サリュートという1968年メキシコシティー五輪にて表出したパフォーマンスの系譜に、オリンピック・プロジェクト・フォー・ヒューマンライツとオリンピック・ボイコット運動があること、さらにその大きな転換点としてアジア、特に日本があらわれてくることを明らかにした。

第1節では、アメリカ国内におけるオリンピック・ボイコット運動の系譜をたどった。1950年代頃から黒人アスリートによる反乱の芽はあったが、1960年代初期に黒人コメデ

ィアンであり公民権運動家でもあるディック・グレゴリー (Dick Gregory) がアスリートによるボイコットの考えを採用し、全米の黒人アスリートにボイコット運動を呼びかけた。グレゴリーの呼びかけは多くの黒人の賛同を集めることはなかったが、1948年と1952年の五輪における金メダリストでアフリカ系アメリカ人の陸上選手であるマル・ホイットフィールド (Mal Whitfield) は、1964の黒人向け雑誌 *Ebony* において、きたる1964年東京五輪に参加資格のある黒人アスリートはボイコットすべきだという主張を発表したことで、グレゴリーの数少ない賛同者となった。ホイットフィールドが米国国務省のためにスポーツ大使として海外に派遣されていた経緯を持っていたことから、彼による全黒人に対する提案は大きな驚きを持って迎え入れられた。また、ホイットフィールドがボイコットを呼びかけた東京五輪の主催国である日本の朝日新聞が、こうしたホイットフィールドの経緯や現状も含めて記事で紹介し、さらに取材を試みたものの失敗に終わった旨を書き記していることから、日本のメディアもこうした米国内の黒人の動きに大きな関心を寄せていたことも明らかとなった。1964年の五輪ボイコットは失敗に終わったものの、社会学者のハリー・エドワーズ (Harry Edwards) によって1960年代後半の黒人アスリートのボイコット運動は引き継がれて行った。

第2節では、そうしたアメリカ国内での動きを経て、ブラック・パワー・サリュートのパフォーマンスが行われる約1年前である1967年の東京で開催された学生大会であるユニバーシアード大会におけるトミー・スミス (Tommy Smith) と、日本の関係性について明らかにした。米国内でくすぶっていたボイコット運動は、1968年のメキシコシティー五輪においても行われる可能性が囁かれていた。そのような状況下で、運動の中心人物であったスミスやカーロスらはボイコットについて特に言及することはなかった。しかし、ユニバーシアード大会においてボイコットの可能性についてはじめて明言したのは、日本人レポーターによる質問がきっかけであったとスミスが振り返るように、このアメリカ国外で開催されたユニバーシアード大会の重要性は明らかである。また、本節では、国名呼称問題で人権を求めて本大会をボイコットしていた朝鮮民主主義人民共和国が、人権運動と結びつけられてボイコットという政治的な手段と結びついた過程と、エドワーズとスミスらがのちに立ち上げたオリンピック・プロジェクト・フォー・ヒューマンライツとの結びつきにブラック・パワー・サリュートの系譜があることを論じた。

第3節では、1968年の日本のメディアが、スミスらのブラック・パワー・サリュートのパフォーマンスを讀解する手段として、走り幅跳びのアフリカ系アメリカ人選手であるボブ・ビーモン (Bob Beamon) とその涙を特に報じたことに注目した。1968年の陸上競技雑誌である『月刊陸上競技』に掲載されたメキシコシティー五輪の陸上競技の風刺画に注

目すると、パフォーマンスをするスミスらが中央に置かれているその横に、その大記録を出した後に涙を流して跪きながら背中には大きな羽根を持つビーモンの絵が描かれている。日本のメディアはスミスらのパフォーマンスやその後の五輪委員会の対応に大きな関心を持ち、多くのメディアが報じたが、彼らに対する意見は米国のもと同様に大きく割れた。一方で、ビーモンのこの姿を報じた日本のメディアの多くが、理想的なアスリート像・美しいスポーツマンシップとして好意的に報じた。日本のメディアの分析を通して、ビーモンが一部スミスらのパフォーマンスに対する賛同を示したことも報じているように、日本のメディアがビーモンをブラック・パワー・サリュートのひとつの系譜としてみていたことが明らかとなった。これにより、日本のメディアがビーモンを通じてブラック・パワー・サリュートを独自に解釈しようとしたことについて論じた。

第4章：

Cold War Icons of Black America: Jackie Robinson, Paul Robeson, and Japan

第4章では、ジャッキー・ロビンソン (Jackie Robinson, 1919-1972) とポール・ロブスン (Paul Robeson, 1898-1976) という二名のアフリカ系アメリカ人の日本への「輸入」の過程をとり上げた。ロビンソンもロブスンも主に1940・1950年代に活躍したアフリカ系アメリカ人として日本に紹介された。しかし、1947年にアフリカ系アメリカ人としてはじめて近代メジャー・リーグ選手となったロビンソンは、日本において特に1950年代だけでなく、1970年代に受容された点に本章は注目した。さらに、国際的な活躍を認められ、その移動性や国境を超えた受容の過程が研究されてきたロブスンに対し、ロビンソンの国境を超えた受容とその果たした役割、さらには冷戦下のブラック・アメリカの肖像としてのロビンソンについてはまだ研究の余地がある。よって、本章では、主にロビンソンに焦点を当て、1970年代日本におけるロビンソンの受容を分析した。その過程で、同じく冷戦期にブラック・アメリカを象徴するアイコンであり、同じくアスリートとしての側面を持つロブスンも分析の対象とした。これにより、1970年代、またはそれ以降にロビンソンが日本に再輸入され、特に子供向けの道徳教科書や伝記物語など、日本の教育の領域において導入された事例の特殊性を明らかなるものとするのを試みた。

第1節では、特にロブスンをとりあげ、日本における様々な教科書において、ロブスンがアメリカの代表的人物として取りあげられた各事例に着目し、分析を行った。1950年代の日本において、ロブスはアフリカ系アメリカ人のフットボール選手・アスリートというよりは、共産党支持者の歌手・役者として受け容れられた。1950年代に出版された子供向けの道徳の学校用教科書では、ロブスは、アフリカ系アメリカ人として差別を向けら

れながらも、そうしたアメリカにおける不平等と公然と戦ったエピソードが紹介された。共産党主義者であり、アンチ・アメリカの代表的な人物として、ロブスンのエピソードはその他の子供向けの教科書・図書において取り上げられている。アメリカによる占領期は、連合軍最高司令官総司令部（SCAP）における民間諜報局において、日本の多くの図書・出版物が検閲のもとに置かれて厳しく管理されたが、アメリカにおける黒人問題について書くこともその対象となった。しかし、占領期の終わりとともにアフリカ系アメリカ人とその歴史、さらには公民権運動についての記述が日本の書籍において増加するにしたがって、ロブスンも多く日本の書籍に登場するようになった。こうした事例をふまえ、本節では、戦後日本において、ロブスは単なるアンチ・アメリカの先駆者としての役割を担っただけではなく、日本における部落問題の文脈の中で大きな注目を集めたことに注目した。それにより、1950年代の日本は、ロブスを米国内における黒人差別と闘うだけでなく、国内の差別と闘う部落問題のシンボルである「黒いアメリカの冷戦期の象徴」として受容したことを論じた。

第2節では、ロビンソンが1950年代の日本でどのように受容されたのかについて分析を行った。ロビンソンが黒人選手として近代メジャー・リーグ初の選手となった1947年は、新たに台頭してきた冷戦の緊張関係の中で、アメリカが外交上の方針を模索していた時期でもあった。そうした背景のもと、冷戦期のアメリカ外交は、国内の人種差別がアメリカの民主主義の優越を主張する上で障害となりつつあること、さらにはアフリカ系アメリカ人の出世物語が戦後日本において注目を集めていることに注目した。よって、冷戦下の世界で覇権をめぐる争いの中、黒人でありながらメジャー・デビューを果たしたロビンソンの「成功物語」はアメリカの民主主義の優越性を主張する重要なシンボルとなっていた。特にロビンソンが活躍した野球は、戦前から日本においても盛んに行われた競技であり、アメリカ野球とは白人選手のみならず、白人野球から排除されたニグロ・リーグで活躍した黒人選手とも、日本野球は交流試合を行った記録が多く残されている。よって、野球は日本とアメリカの「共通言語」であるとして、言語ではない交流手段とみなされ、積極的な文化外交が推進された。例えば、占領期も含めたアメリカ国内のニュースを報じたボイス・オブ・アメリカ（VOA）は、ロビンソンがメジャー・リーグのデビューを果たしたこと、さらにロビンソンが日本に訪れる予定があり、来日を心待ちにしている旨を積極的に日本に対して報じている。戦前からブラック・アメリカの野球とも交流を行ってきた日本にとって、ロビンソンが人種の壁を打ち破ったというニュースは遠い国の物語ではなく、むしろ関心を持って報じられた。よって、ブルックリン・ドジャース（Brooklyn Dodgers）のチームの一員として1956年来日を果たしたロビンソンが、日本人との交

流を深める様子を日本のメディアは多く報じた。特に、日本のメディアは、ロビンソンの優れた野球における技術だけでなく、謙虚な振る舞いや日本文化へ示した敬意についても報道しており、来日した中で3名の黒人選手だけを写した写真を掲載するなど、ロビンソンの控えめで謙虚な姿勢や黒い肌に大きな関心を寄せていたことが明らかとなった。こうした出来事を背景に、特に本節では、ロビンソンの1950年代の来日は、高まりつつあった戦後日本のアメリカに対する敵対意識を和らげ、日本におけるアメリカへの親近感を高めるといった冷戦下のイデオロギー的な使命を担ったことを論じた。

第3節では、1970年代の日本がロビンソンを再発見し、再輸入した過程に注目し、分析を行った。1950年代に行われたロビンソンのデビューに関する報道や来日に伴う交流試合や文化交流は、外交上の文化大使としての機能を期待されてのものであったが、特に1970年代の日本においてロビンソンの自伝や物語が多く出版された背景には、ロビンソンに対する日本独自の解釈・ナラティブがしていることに本節は注目した。日本のメディアにおいてロビンソンは、米国内にあるような民主主義・平等・個人の成功のシンボルとしてだけでなく、「黒い侍」として忍耐や武士道のシンボルとして描かれたことを論じた。

第4節では、こうしたロビンソンの「黒い侍」としての忍耐や武士道を教える不変の教育装置としての価値が、1970年代の日本においても大きな役割を担ったことを論じた。ロビンソンが再び受容された1970年代の日本では、こうしたロビンソンの「黒い侍」のイメージは、高度経済成長期を経て以前とは異なる豊かな国家となった日本における、アメリカ合衆国との新たな対立を緩衝することに用いられた。主にアメリカ合衆国からやってきた、日本のプロ野球界における「助っ人外国人」選手と日本選手との間における緊張状態を緩和することに貢献したことを明らかにした。

Epilogue

エピローグとなる本章では、堂場瞬一のスポーツ小説である『八月からの手紙』(2011)を例にあげ、スポーツの世界におけるブラック・アメリカと日本の接近が、現代においても日本の作家たちの想像力を刺激していることを述べた。

以上の議論を通じ、本論文は日本が作り出したオリジナルなナラティブを分析することを試みた。冷戦期にアメリカ合衆国からやってきた黒人選手たちに日本のメディアが着目した視点を分析することで、そうした実践がいかに戦後日本で行われ、スポーツという領域は、黒人の身体、移動性、イメージ、影響力、評価が作り出されていく独特な場であったこと、また日本のメディアがいかに黒人アスリートの表象を作り出して来たかの力学に

ついて明らかにした。